

壽院
古与
流
用

壽院



春色梅見譽美 卷の六

江戸

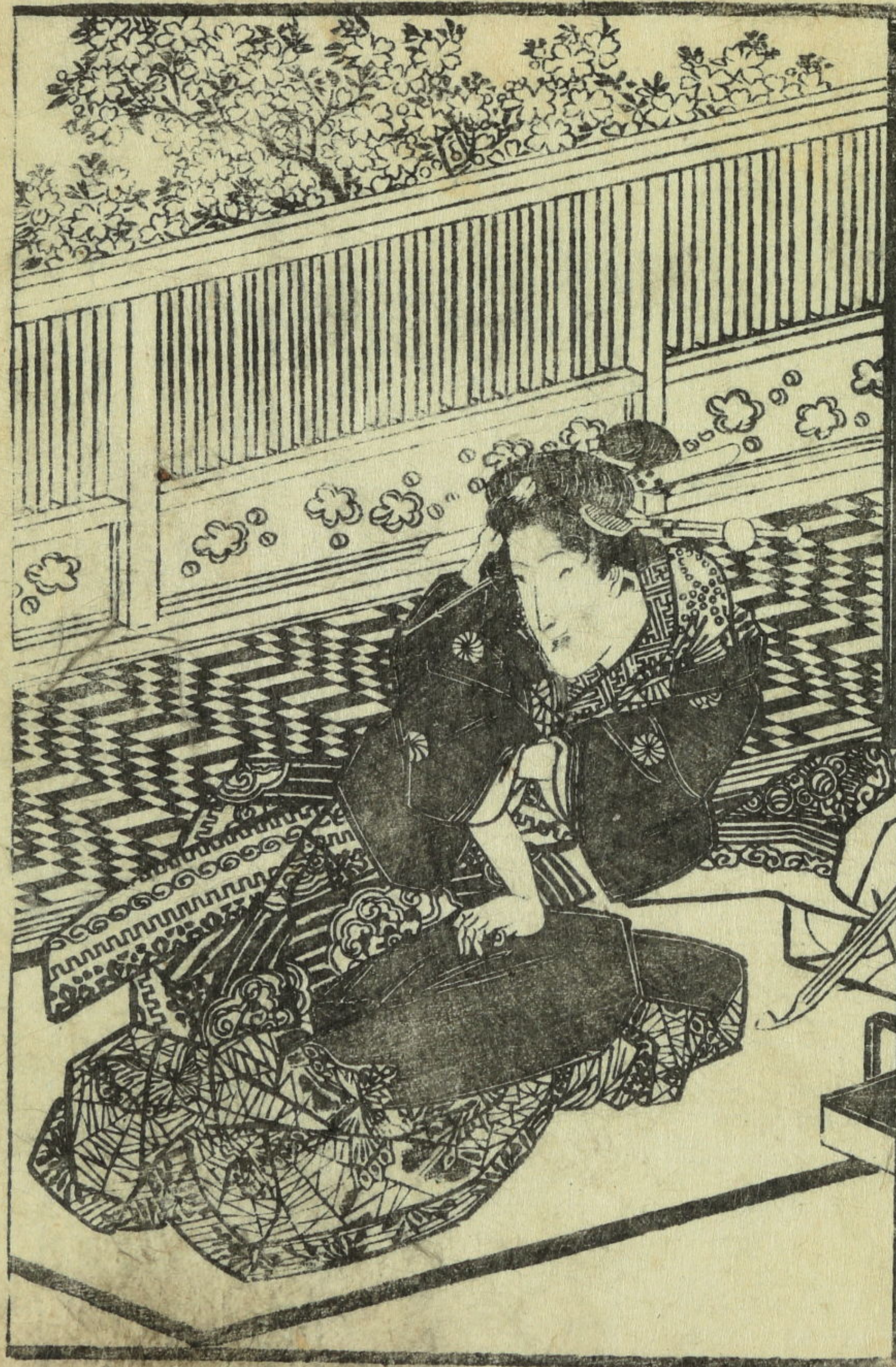
狂訓亭主人作

第十一齣

鳥一羽瀧て出たり朝接露残會一此糸の客とわたり
 て朝まぐら霧屋が家小かするひ一表二階の近酒より
 ちりりする皿小鉢下へ持ゆくその跡小鉢の
 ハグ小鉢のね恋衣思小鉢存るにあらねば
 此糸ぐら一玉米八さえあるのさり糸が自

愚智ちやいのさゝの願がけをまゝにうゑどの禁物となるは推し
てかりにいしるるあえまうとやあいのいしあうそりやア成る
るど最さえの男の心のいづろふ何の言もあえしづらが
強まうのふ日のよしろ私があまふ達でこそまでふ
あこ信切と野のいよ志ぎふあいのいししてのあえまうとやあ
せんうよ「おのええとそりやアまらねと恨とあつ馬のりまう
てもゆいゆはたとのぞれません今さら私があのかうに
やてもえ推しく言はらうしとやいはでもあひませう

けまどそりくそりして返とやあのませんヨの「おそりや
ま初めうして表はたれ自と踏まる合はで甘はりて
上上「のが私のあまらうとまらう「そふも言はるま
まうての減ふ私が濟ません実はよま多く慕まえのお供に
てあまをまわつてあええの野のいおままと入言
おどこままてしるでもあひまますう内野の遠きるあのま
おのええい下へ私にで言はれまて堀の舟舟で廻津変は
まらよあまうて濱の宿の今まあまえのお迷ひ



あつふよおのえいしん言のめいこやまするらるるに
おきよあつひのまをのまするまとらとどおのしん世系ハ胸
ふあつてあひのるるの山崎やららるの行の浮川
竹のあつまの身をも傾城の狩とりあつて別は時方
畑もあつて一まの親の兄弟のこあつて苦界の年のうち
色と高ひをてつてつて用をしても月と日の永い勤
め小短夜の種もあつて暁と待夜もあつてあつて
き夜の鶉の音恨む床のらち九分のくらと一女の

樂とてまてえ男の気ふよつて尽せし情とあつて
まのあつても多くあつてあつてあつてあつてあつて
あつて嗟傾城小実なる一とら板橋雜記の情よつて
らづ女即の終身ハとりまするらるるに
の上のこすすともあつてあつてあつてあつてあつて
のが花あつて折の風情あつて真の契情のこらふ
して素人の操と守ると目と同志へつてあつてあつて
必竟このすし系が真の身の思いつつあつてあつてあつて

三編の七下め小辨びん一

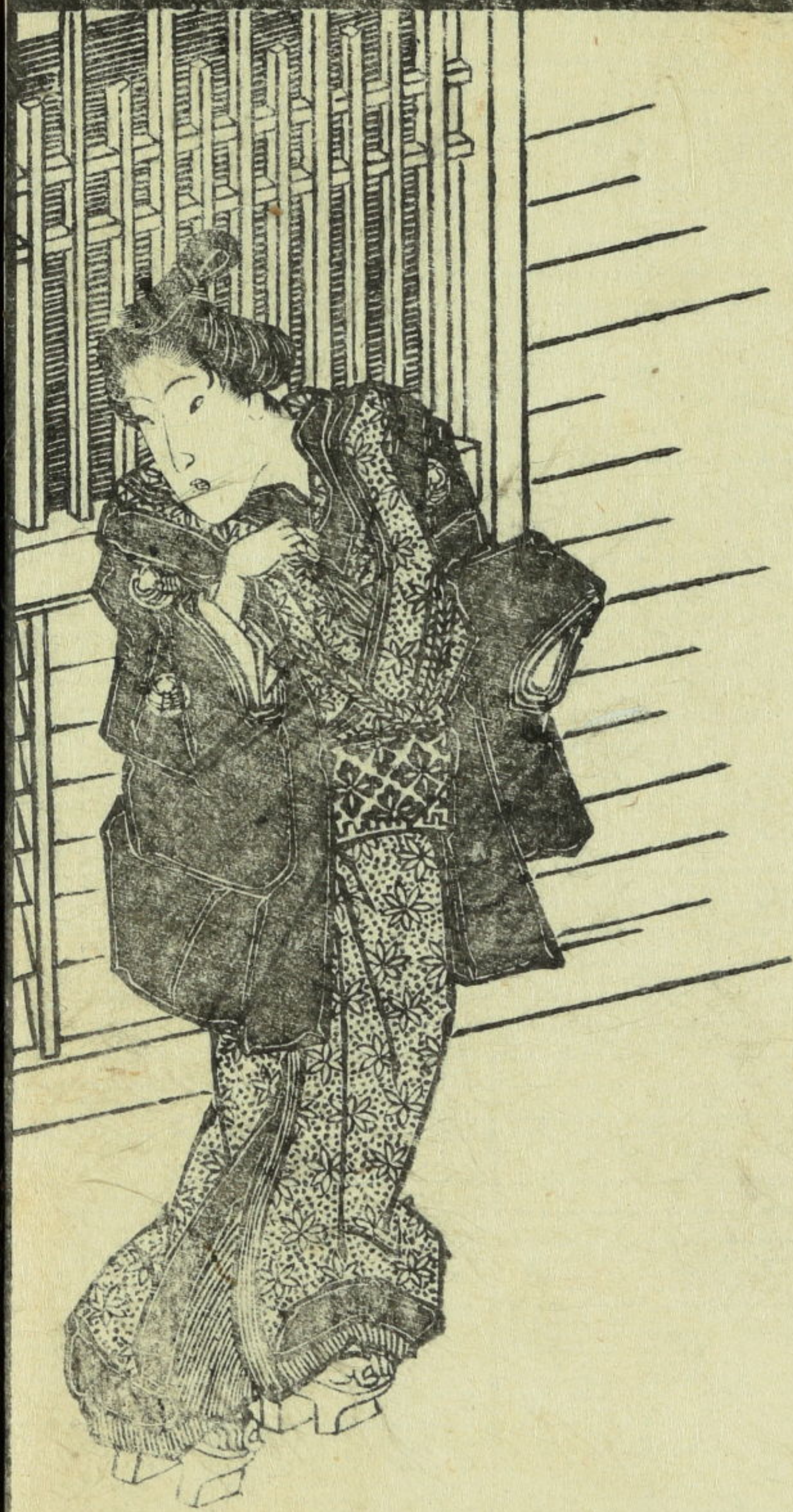
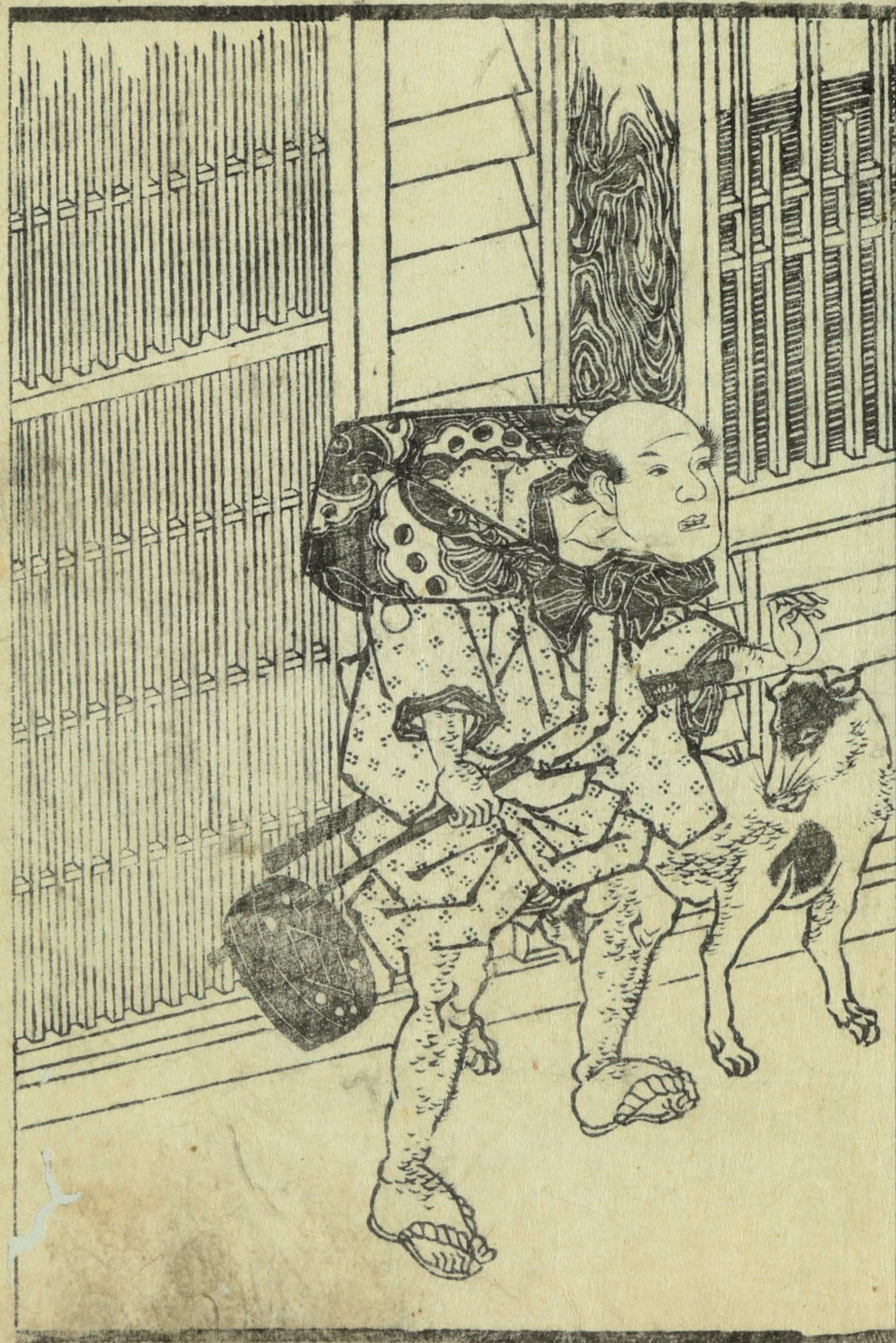
省官藤巻ふじまき世多よぶるふようてしほご批評ひひょう
をすうところの作者さくしや自中みづかの奇境ききやうとまうけ
てまうけつたてぬきとまうべよ米八やちお蝶てう一此この
糸が実情じつじやうと三幅對さんぷくたいと一しうう新奇しんきのゆ
俊とよあり発市はつしの日ひとまうせめとねがふのそ

第十二編

八重やえといふエくのて間ま不ふ迷ま一は林はやしの花はなぞらる時ときあり

あざうまご春風はるかぜのさまのずやおのといひのまのごら
あつくるまらきき今日こんにちの身ハの丹に赤せきがあふ
と奉ほうふおの世よをま召まさうの海うみ理り緒じゆとありの各ごも
竹たけ蝶てう吉きちとおひのくく月つき待まち月つき待まちとお招まねくの海うみ
るりのままききるるもも宮みや芝しば方かたが丹誠じやう不ふ仕しああびび
藝げいの間わどよくよく燈とう嶋しま田でんの髪髪かみとまうて男おとこに
對たい情じやうが今ままららるる若わかええ鬘まげ化粧けいざうとう美み容ようをう
二階にがいの窓よよとおひひらら今いま宵よよよとお客きやくの好

く蝶吉くてうきちライつえむらめコウお蝶てうかきまうひ
まへまどびえまへひかげん小空耳そらみみとをううせエ
えむらめ五まへマまらなる初はつこまーあえん
モウ九ツこゝろが鳴こアチのうげんうげんにしく支度しどをね
ろろをろ麻くましくまそまでも今自いまの出めでのハ私こゝろ
グ語こととつけね人のごうよく後きうつて行いく
と年としのめヲ後ごマましをねるうにガがからねん
でみるみとまへさくくといふのふちちぐくして
居いヤアがつくおお玉たまーま入でおろとろ座ざんがわ
とろいふと足元あしもとう鳥とりの立たちこまうふさへま
がアあ何なにでもおまことまこととと麻まよよしてみるううぞ
飯い小こも親おやごぞあえまうまうに返答こたへとーとうう
僕わががまてくのあてへまう小何こなにもわのりねね
まへんえをまらからうごうでめめ人の藝げいくら
いいで二十にじゅうの二十にじゅうのといふ金の利合りあひもまらるの
そまごうう九こゝろ文ぶん太たいさるがトといひうけてまーびと



竹蝶吉清屋主人
百三十三

十人^{どうせ}ちこも^{えん}且^{また}船^{ふね}の二人^{ふたり}や二人^{ふたり}づゝいさらぬ
と^とい^いけ^けが^があ^ある^るの^のめ^めの^のう^うま^まの^のえ^えお^お客^{きやく}と^と大^{おほ}切^{きり}不^ふ
勤^とめて^と淨^{じやう}穢^じ狂^{きやう}と^と精^{せい}知^ちし^しませ^せう^うが^がど^どふ^ふぞ^ぞ且^{また}わ^わ
を^をさ^さる^るの^の尤^{さや}丈^だ太^たさ^さぬ^ぬの^のお^お世^せ話^わよ^よち^ちる^るの^のと^とい^いふ
る^るの^の堪^え忍^ひし^して^てお^おく^くえ^える^るさ^さの^のヨ^よあ^あり^りえ^えあ^あを^をさ^さう
り^りや^や此^こ方^ちも^も言^いた^たど^ども^もめ^め入^い勝^かふ^ふと^と言^いし^しち^ちや^や
お^おわ^わね^ねく^くこ^こ淨^{じやう}ら^らう^うと^と誓^{ちか}ひ^ひの^のう^うぐ^ぐら^らあ^あを^をこ^こ十^{じゆ}兩^{りやう}
う^うの^の金^{かね}と^と女^めす^すの^のめ^めが^があ^ある^るよ^よと^とめ^めり^りま^まさ^さる^る時^{とき}

の用^{もち}ひ^ひ不^ふ受^{じゆ}ま^まて^てある^る二^に枚^{まい}の^の花^{はな}文^{ぶん}且^{また}船^{ふね}が^がい^いや
あ^ある^る恋^{こひ}が^が違^{ちが}ひ^ひの^の郭^{かく}へ^へか^かり^りて^て年^{ねん}一^{いつ}た^たい^いま^まは^は故^こ
々^々の^のう^うぐ^ぐその^の中^{ちゆう}で^で苦^く界^{がい}と^とす^する^るも^も亦^{また}よ^よら^らう
且^{また}船^{ふね}の^のい^いや^やど^ども^もあ^あら^らう^うの^の女^めア^アサ^サ母^ぼさ^さえ^えま^まう
よ^よの^のこ^こね^ね出^でが^がけ^けふ^ふお^おま^まん^んが^が小^こ言^{ごん}と^とお^おら^らい^いと^とい^いて^て
き^きに^にか^から^らう^うお^おま^まの^の機^が娘^{ぢやう}も^もと^とり^りあ^あく^くの^のヨ^よは^は
い^いご^ごう^うし^しや^やる^ると^とう^うゆ^ゆら^らる^る性^{じやう}と^とい^いふ^ふヨ^よ。ヨ^よウ^う小^こ
言^{ごん}と^とい^いふ^ふと^と儼^{げん}し^しと^と身^みで^で居^ゐる^るが^が大^{おほ}が^がこ^こ其^{その}方^ちの^の腹^{はら}

の中ぢや元主人ごとのいふ氣づらうがそのや
あるむど六七幸いぞんふたより一年むどとんぞ
ころあく頼手もよく唐琴やの女郎氣の世落
して居る時ゆゑふちも奉公人とまきまつて
勤めて居やうーねいよく何すきで昔かころの
のりかへおねがえぬるとあつて居やう志
ませえヨトは少いりどむいひをいとしりも
あすりのつるお阿が雑言娘とえよ迫るゝこの

ちうくく折る表の格子戸あけ武家の使と
ふくろ男ハイトおたのこやますす梶原の舟き
うゝ参りまゝの蝶吉えんの遊ひでござるま
あハらくこまのまお大まふは客方さるまヨ蝶吉
ちやく支度とくねうマお茶でもあびませう
今日ハお客さるハちげのさあでござりませう
候ハイお客より婆老氣の方がは山でござり
すす接川善好接川新好湯又話家でも

龍りゆう調てう小せう折せつ橋きょう清せい元げんでの志し津つ太たい夫ふ小せう壽じゆ女にょ太たい
夫おとこ延のび津つ笑わら踊おど了りでの西せい川せん扇せん義ぎ太たい夫ふと
此こ方かたのお蝶てうさえ小せうでん何なにでも多た大たいさうとき
さこ子こ多たまくそうやア多たおのらうらうね 彼かれ不ふやく
まごとあるへかうが且那なの心むらの婦多た川せん
の米八はち梅ばい次じトりおおちりううおお蝶てうのあらうと二階かい
ようおちりまさらうりこまとまきく米まい八はちとかり
ゆおおちりとらへ多た多たそをあらうとまくとり

ココノノままののでもねんやうふらららとあらうらうモシ
おおちりぞおおちりのやますモ多たく余野の子こ共どもと
透とほつときが付つねでとまり切す使たサおお母ははをう
言いふまえる娘むすめ子こ共どものでまさらうのおおちりの方かたが
おおちりのこらいとようにおおちりのまさらうやせらう子とおち
りのまさらうのまさらう使たサおおちりのまさらうで今いま日ひの盆
夜やおおちりのまさらう使たサおおちりのまさらうとつけねる
そおちりとおちりのまさらうの梅うめ我われのままらう愛敬けい自じらうのまさらうで

あはれ七子上羽の蝶の菅履後下着の角地裳も大
きく漆一丁子菱傍伴の袴の白綾小赤紅を書画
の印づく袖の緋麻子帯の黒びろろど赤紅の山も
のくらは仕立も目もろろ三井格子（三井格子の腰帯ハ）
おあえど白茶の金まうろろ勿論巾の寸五分でも透如流
行不辨もいんある若丸鬘じ小差（小差の）の腰帯もどもお蝶が
身にいつまもあつてで楽まぬ是の浮世うまもぬ庄
春色梅見誉美六了
あつとろろおよなれ

春色梅曆

子細（子細）く顔で息子を禁制親父
も。功德池内（功德池内）の字涌出（涌出）のあつて。
殊勝（殊勝）の数珠（数珠）の母親（母親）も喜提
樹の二段（樹の二段）より生れ（生れ）をさす。これをもとめ
さし。男の玉お后の當もあつて地すもあつて
まの。兎角（兎角）出番（出番）の娘もあつて達の趣馬（趣馬）も

江戸為永春水著

あ

天保三壬辰年

當今派

永壽堂 西村與八

活書林

行 第一魁

文永堂 大島屋傳右門

春正月吉且

江戸柳川重信画

あ

